指扇小だより

教育目標　やり抜く子の育成
かしこく　やさしく　たくましく　あたたかく

令和７年１０月３１日　　第７号
さいたま市立指扇小学校
〒331-0078
さいたま市西区西大宮１丁目４９－６
電話 048-623-0133 FAX 048-624-2200
https://sashiogi-e.saitama-city.ed.jp

寄り添うという勇気

校長　小松　伸弘

秋が深まり、校庭の木々も少しずつ葉を落としています。落ち葉を踏む子どもたちの笑い声に、季節の移ろいとともに心の成長を感じるこの頃です。

先日、有村架純さん主演の映画『前科者』(2022 年／岸善幸監督・香川まさひと原作) を観ました。元受刑者という、社会の中で生きづらさを抱える人々を静かに描いた作品で、派手さはありませんが、心の奥に長く残る映画でした。

その中で、元受刑者の女性が語る言葉があります。

「警察官も裁判官も言うことは正しい。でも、私の人生はそんな常識で測れるもんじゃない」。その一言を聞いたとき、私の脳裏にある記憶が甦りました。

それは、かつて留学先で出会った友人が、日本で自転車を盗んで捕まり、裁判を受けることになったときのことです。私は国選弁護人から証人として呼ばれ、彼の真面目な性格について話しました。裁判の最後に、裁判官がこう言ったのです。

「急いでいるなら、タクシーに乗ればよかったのに。」

そんなお金があれば、そもそも彼は盗まなかったのだと私は心の中で叫びました。正しい言葉が、ある現実の前ではどこか空回りしてしまうことがあります。

学校でも似たようなことを感じることがあります。感情を上手に表現できず手が出てしまう子や、攻撃的な言葉を泣きながら黒板に書き殴る子。もちろん、暴力や暴言はいけませんし、被害を受けたお子さんや保護者の不安は察して余りあるものです。そして私たち教員も多くの場合、自らの常識や正しさを持ってその子たちと向き合うことになります。

けれども、その奥にある「なぜそうしたのか」という思いを、私たちは丁寧にたどらなければなりません。子どもがとった行動の裏には、悲しさや悔しさ、言葉にできない苦しさが隠れていることがあります。そこに目を向けることが、次への一歩につながりますし、それが、教育相談の意義だと感じるのです。

寄り添うとは、自分の常識をそっと横に置いて、相手の痛みを一度受けとめてみること。簡単なことではありませんが、そこから本当の理解が始まるのだと思います。葉を落とした木々が静かに力を蓄えるように、子どもたちも心の奥で何かを育てています。その芽を折らずに、温かく見守れる学校でありたい――そんな願いを込めて、今日も子どもたちと向き合っています。

11 月の運動会に向けて、どの学年も練習を始めています。練習の過程で上手くいかないこともあるかもしれませんが、子どもたちは自力で、或いは助け合いながら乗り越えていくと思います。結果よりもその過程に、御家庭からも静かなエールを送っていただければ幸いです。